関西大学『独逸文学』第48号 2004年3月

二宮まや先生をお送りするに際して

諸沢　　巖

二宮まや先生がお健やかに古稀を迎えられたことをまず心から慶賀申し上げたく存じます。その一方でまたこの記念号をお贈りするのは同時に先生が専任職をお引きになることと思うと些かの感慨と一抹の寂しさが生ずるのを禁じえません。

先生にお出でいただいたのは1970年、まだ紛争の余韻が消えやらぬ時とて、初めての女性の同僚の出現に清々しい涼風を得た思いがしたのでした。実はそれ以前に先生のことはうかがっておりました。本学で長年教鞭をとられていたドイツ人教師W. リルツ（Werner Rilz）氏が阪神地区の若手ゲルマニストたち相手に開かれていた講習会のことを雑談中に語られた折に、また先達上村弘雄氏が詩の解釈の話をされた時に先生のお名前が出ていたのを記憶しております。独逸文学科のスタッフとなられてから今日までの先生を失礼ながら一言で表すとしたら見事に実績を示された方と言い得るでしょう。

先生の常に穏やかで誠実な、そしてときとして示される厳しい姿勢は、熱心な指導と相俟って多くの学生に敬慕されておりました。先生の授業計画遂行の情熱を恥かしながら実感したことがありました。私と先生の担当科目を共通に受講している学生たちが合宿旅行を企んだ時のこと、曜日と時間の関係から厚かましくも休講をお願いして欲しいというのでお話したところ断固断られてしまったのでした。そこにはむしろご自分に対する厳しさが感じられました。ご研究の面でも先生は立派な業績を残されています。H. カロッサ（Hans Carossa），C. F. マイヤー（Conrad Ferdinand Meyer），H. v. クライスト（Heinrich von Kleist），A. v. アルニム（Achim von Arnim）などの詩人の作品を中心とした幅の広いご研究ですが、すべて対象とするものを豊かな感性で受け止められ、冷徹な論理で分析され、的確な論証でまとめられた強い説得力のあるものばかりで、私どもも教えられるところ大でありましたし、所属しておられる

各学会からも高く評価されているものです。先生は1975年にお気の毒にもお嬢様を病気で亡くされました。それ以後の論文の増大が物語っているのは何でありましょう。その悲しみを振り払いつつ精進されているお姿以外の何物でもありますまい。先生のご知見に刺激をうけて研究者に育っていった者も二三に留まりませんし、ご人格に接し得たことを誇りとしている卒業生も少なくありません。先生はまた纏め役や、代表的な委員として学科の発展にご尽力いただいたばかりか、1980年からは学部まで越えて教養部長として活躍され、冬の時代の到来を控えて山積する案件の采配処理に努められましたが、その見識と鋭い批判精神に裏打ちされた指導的手腕には私共は脱帽するばかりでありました。学会活動においてもまたしかりであることは1996年から2期4年間に亙り日本独文学会阪神支部でもある阪神ドイツ文学会の会長を務められていることからも明らかでありましょう。ここまで述べてきたものだけでも先生の教育、研究そして大学行政への貢献は大なるものがあり、私共の模範に値するものでもあります。

このように存在感の大きい先生がいつもの場所にはおられなくなることにはこの上ない空白感が迫るものなのですが、これも変えられないこととて耐えざるをえないことです。ご退任後も先生には名高いご主人ともどものご計画もあると側聞しておりますが、まずその滞りない実現を祈念するとともに、今後もときには来学され、文学部改組にともない生じてくるであろう様々な問題に対するご意見を決してお嫌いではないワインでも片手になさりながら聞かせていただけるのを期待致したく存じます。今後のご健勝を心から願って止みません。

2004年1月8日